

なぜ「モノ」がない？

室蘭栄高校
新聞局製作



高校生の視点から見た室蘭の現状

(室蘭栄高校新聞局の皆さん)

高校生から見た室蘭は、どのように映っているのか。どう感じているのか。そこが知りたい。今回、栄高校新聞局(岩井史絵局長)に、室蘭が抱えている問題と今後の展望を鋭く提起してもらった。

室蘭に 欠けているものは？

室蘭には「モノ」が無い。若者たちから、そのような声を多数聞いた。具体的に「モノ」とは主に流行の服、本などだが、遊ぶところなども含めて、多種多様なながらも現代の若者には無くてはならないものが、室蘭には欠けているという実態が明らかとなった。

これらの実態を店側はどう考えているのかを確かめるため、私たちは市内の大型店に取材を行った。そこで取材の結果を新聞局内で話し合ううちに、さらに「モノ」が無いのは室蘭に若者が少ないからではないか、という問題へと発展していった。

モノがない ＝(イコール) 若者が来ない

取材をすべく、室蘭の大型デパートに取材を申し込んだところ、ポストフル室蘭の江頭元次営業マネージャーが、快く引き受けてくれた。

若者を含めた買い物客の意見を聞く場について、質問したところ「ポストフル室蘭の従業員約200人の中には子供がいる家庭が多く、様々な意見を聞いている。また、年に3回モニター会議を行っている。テーマを

決めてお客様から意見をいただきたい、店の方から問題提起をして答えていただく機会を設けている」と、江頭マネージャーは説明してくれた。では、若者も含めた消費者の意見を聞く機会がありながら、どうして若者向けの「モノ」や店が少ないのだろうか。

室蘭市は道内10万人都市の中で小樽市に次いで二番目に高齢者が多い。なおかつポストフル室蘭の周辺には高齢者が多く住んでおり、高齢者向けの店づくりをしているようだ。

「若者にも支持されるような店づくりをしなければならぬと思うが、若者が少ないまちなので難しい。多くのお客様に利用していただくためには、やはり高齢者向けの店づくりが中心になる」といった店側の現状を江頭マネージャーは話してくれた。

ところで、なぜ今の室蘭には若者がいなくなってしまうのだろうか。この疑問をめぐって考えた結果、一つの結論にたどり着いた。それは、室蘭には若者に合った仕事が少ないの



「モノはたくさんあるが若者向けのモノは少ない」

ではないかということである。この真相を確かめるべく、市の手塚満紀経済部長に話を聞いてみるため、取材をお願いした。

限られた就職先

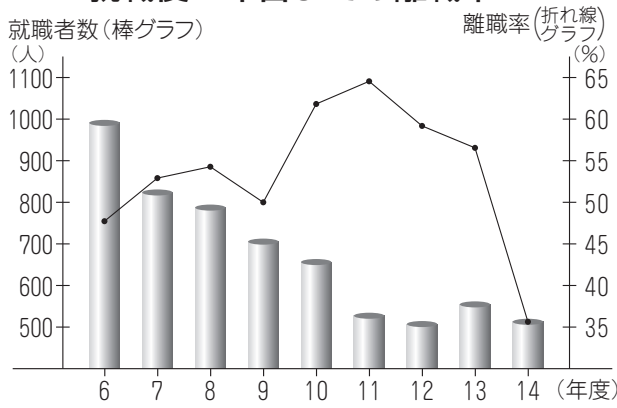
ハローワーク室蘭管内では、新規高校卒業予定の就職希望者に対してなんと2倍以上の求人があり、職種を問わなければ希望者全員が就職できる現状であることが、手塚部長の説明でわかった。意外であった。それでは、どうして若者が少ないのか。大きな問題が存在していた。新規高校卒業業者で就職した人の多くが3年以内に離職するケースが後を絶たないという。これが若年層が手薄になっている原因の一つとも思われる(3ページグラフを参照)。

主な原因として、室蘭にある企業の特徴と若者が求める職種に格差があると分析されているようだ。古くから室蘭は、鉄鋼、造船等『ものづくり』が盛んなまちだ。やりがいのある仕事の一方、労働負担を敬遠する現代の若年層は、より仕事のしやすい環境を求めて離職するという構図があるように見える。

確かに一理ある。しかし、若者が室蘭からいなくなるのは、それだけが原因だろうか。

生涯を室蘭で暮らすためには「就職」と「希望職種の有無」という避けることの出来ない問題がある。し

高校生の就職者数と 就職後3年目までの離職率



※ただし、離職率については、13年度は2年間、14年度は1年間の集計とする。

かも、ものづくりのまちとして発展したまちの特性から考えると、高校生で文系の人間にとっては不利な点が多い。鉄鋼・造船等の工業が盛んだが、裏を返せば、室蘭には限られた職種しかないということになる。実際に、我々新聞局では文系の志望者が多く、その全員が進学・就職のため将来室蘭を離れざるをえないと考えているのである。

手塚部長から「就職の際は自分の適性にあった職種を見定めるべき」とのアドバイスをいただいた。その通りである。しかし、現在の我々が、将来室蘭で就職しようと考えたとき、選択の余地が少ないのが現状。つまり、「就職口はあるが、就きたい職業がない」ということだ。こうなると、多岐に渡った職種がある都市部に若者が進出するしかないと思われる。

これが解消されな
い限り、
離職者は
減らず、
若者の室
蘭離れも
加速し、
高齢化の
歯止めも
かからな
い。



若者の就職状況などを、市の手塚経済部長にインタビュー

室蘭で暮らしたい。しかし希望の職種が見つからないから、胆振管外や道外に移り住まねばならない。このようなジレンマに悩む若者は少なくないだろう。仮に、室蘭に住むことを優先させるために自分の適性に合っていない職に就いたとしても、結局は離職し、同じ問題に行き着いてしまう。この流れを止めなければ、若者の減少に歯止めをかけることは難しいだろう。

では、室蘭に若年層を引き止める、または呼び寄せる手立ては無いのだろうか。

「若者を含めた雇用の創出に向け、企業誘致活動も積極的にやっていきたい」という手塚部長。新しい企業の進出によって若者を引き止めることができるかと考察できる。つまり、かつてのような「活気あふれるまち・室蘭」によみがえらせたいのであれば、工業系以外の職など、若者のニーズに合った職種を増やすことが

必要であり、企業の進出による多岐に渡る職種を備えることが、今求められていることだろう。

このままでは室蘭はちよう落の一途をたどる一方で、悪循環の構図（下図参照）に歯止めがかからない。室蘭の将来を考えるとき、今最も求められていることは変革である。そのためには、まず、市民から変わっていくことが必要ではないか。

提言・ 室蘭学園都市計画

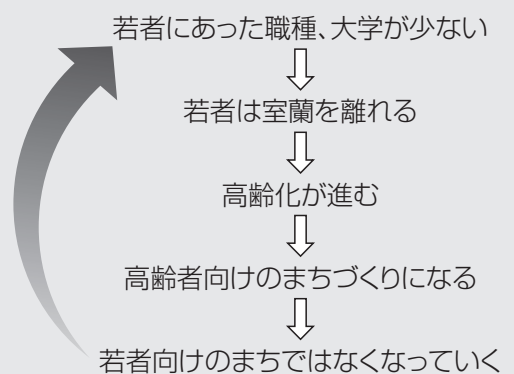
では具体的にどのような変革すべきだろうか。我々、室蘭栄高校新聞局は、「室蘭学園都市計画案」を提言したいと思う。

室蘭はこれまで述べてきたとおり、理工学関係が発展してきたまちだ。だから、室蘭工業大学の研究施設の一つとして、バイオテクノロジーや鉄鋼技術の向上を核とした研究所・製品開発所などを設け、今後を見据えた新しい理工学関係の職種を増やす取り組みなどを行うことで、新たな雇用の創出し、また、選択の幅を広げることができるだろう。

その一方で、文系を志望する若年層は行き場を失い、室蘭から離れざるを得なくなったという事実を真摯に受け止めなければならない。

そこで、市内に大きな文系大学を設け、文系の人間が室蘭に集約できるようにする。さらに、管内に大き

室蘭・悪循環の方程式



な文学研究館兼博物館のようなものや、美術館といった施設を作ることでも可能ではないだろうか。また、現在話題になっている法科大学院の設置を行い、次世代の法曹界充実を図るといったのもよいだろう。

また、交通網の整備などといった新たな課題も生まれ、結果的には、建築業なども仕事が増加するだろう。このような学園都市を作ることにより、近隣市町村は、確実に人口が増加する。新たな住宅街の建設などといった都市計画も浮上するだろう。もちろん、若年層の人口が急増することにより、近隣の商店に「若者向けのものがない！」と嘆く心配も無くなる訳だ。

話のスケールが大き過ぎると思われるかもしれない。しかし、今の室蘭の現状を打開するには、これくらい、大規模な変革が必要だろう。